

エネルギーを 学ぶ・伝える・考える



2024年3月11日「東日本大震災追悼集会」で阿部校長先生が講話。全校生徒が参加し、震災を自分ごととして捉える大切さを学びました

「3・11からの学び」を通して 次世代の未来を考える

東日本大震災から13年。前例のない原子力災害に見舞われた福島県では、災害からの復興に向け、さまざまな取り組みが行われています。一方で、月日の経過とともに震災の記憶の風化が進むという課題もあります。現在、福島県内の小中学生は、震災当時の記憶がほとんどない、あるいは震災後に生まれた世代となりました。「教育現場において、震災の経験や教訓を次世代に伝えていくことは今もこれからも必要なこと」。そうお話しくださったのは、昨年創立60周年を迎えた福島市立松陵中学校の校長・阿部洋己あべひろき先生です。阿部先生は、震災直後から福島県教育委員会などで放射線教育の事業化や福島県三春町の※1コミュニケーション福島島の立ち上げに尽力されました。現在は、福島の未来を担う生徒たちが震災から得た教訓を生かし、将来役立つ力を養えるよう、「3・11からの学び」を学校教育に取り入れています。

震災直後、福島県教育委員会で 放射線教育の教材作成に着手

2011年3月、福島県教育委員会に在籍していた阿部先生は、福島県特有の課題となった「原子力事故による放射線の健康影響」に関する資料作成等のプロジェクトメンバーとなり、放射線に関する正しい知識の習得や放射線教育の在り方など、教員のための教材や副読本の作成に着手しました。初めての取り組みで、試行錯誤の連続だった当時を振り返ります。

「原子力発電の資料や県民の健康調査、放射性物質を含む土壌等の除染に関する資料などを集めたものの、メンバーの大半が専門的な放射線の知識を持ち合わせておらず、どの情報をどう提示するのか、不安や迷いが多々ありました。それでも、福島県での放射線学習は震災を乗り越えるための大切な教育の一つだと信じて課題と向き合いました。例えば、敷地内の空間線量の数値一つでもその数値が安全なのか、そうでないのか、体温の感覚と同じような相場観を養えるように、放射線について一定の知識が習得できる教材づくりを目指しました」

震災や放射線について 自分ごととして捉えてほしい

2015年、阿部先生は富岡町立富岡第一中学校（現・富岡中学校）の校長に就任。福島県では依然として次世代層への放射線の健康影響が懸念されていたことから、生徒が放射線に関する正しい知識を習得できるよう、他の先生方とともに放射線教育を実践してきました。

その後2020年に福島県立本宮高校校長、そして震災から11年後の2022年に松陵中学校の校長に就任しました。震災当時の記憶がない生徒にとってどのような放射線教育が必要なのか、さらに研究を重ねた阿部先生は、「震災や放射線に起因する課題に対して、自分たちができることは何か、自分ごととして考えることが大切」と語ります。「生徒が日常の中で震災をきっかけとした教訓を生かすことは、将来に役立つ力を養うとともにそれが福島の復興につながると思えます」。そんな信念を胸に、阿部先生は震災からの学びの授業「3・11からの学び」を取り入れるようになりました。

訪れた場所

福島市立松陵中学校
福島県福島市松川町字上桜内3-4



▲同校の教育目標。STEAM教育（Science・科学、Technology・技術、Engineering・工学、Art・芸術、Mathematics・数学を対象とした教育概念）の視点から近隣の大学とも連携を図っています



▲福島市立松陵中学校の
阿部洋己校長先生



1. 坪倉先生の放射線講座では、放射線は自然界に存在することや、少量であれば影響はないことを学びました
2. 原子力災害を想定した避難訓練の様子。保護者への確実な引き渡しも確認します
3. 避難訓練では、被ばくを防ぐ観点から保護者は車で学校に向かいます。そのため、先生方は車の誘導方法も確認します



4. 3月11日に行われた追悼集会の様子。1年を通して行った震災・放射線教育の振り返りも行いました
5. 「道徳教育」で教壇に立つ渡邊真魚教授。学年によって異なるエピソードを取り上げました
6. 阿部先生や渡邊先生が制作に携わった『ふくしま道徳教育資料集』。3冊セットで、県内の小中学校の教材として使われています

外部講師との連携で 放射線教育の在り方を考える

阿部先生は「3・11からの学び」の取り組みの一つとして、外部講師と連携し2回にわたって放射線講座を実施しました。1回目の放射線講座は「なぜ放射線について学ぶのか」をテーマに10月に開催。講師は本誌『ひろば』で「教えて！坪倉先生 気になるほうしゃせん」を連載する福島県立医科大学医学部教授の坪倉正治先生です。

「震災当時の記憶がほとんどない生徒たちが、放射線に対し過度な恐怖や不安を抱かないよう、事実を客観的に伝え、正しい知識を持って理解を深めることが必要だと思いました」と阿部先生。

「講座では、放射線の計測結果や国際機関などによる評価を経て『将来的な健康影響は見られそうにない』という結論に到達しているものの、一方で情報が十分に浸透していない現状について、坪倉先生に解説いただきました。いたずらに不安をおおる必要はないとお話には説得力がありました」

学んだ知識を生かして 避難訓練につなげる

11月に開催した2回目の放射線講座は「原子力災害事故からの避難行動」がテーマです。坪倉先生は避難するときに気を付ける点や必要な知識をはじめ、放射性ヨウ素から甲状腺を守るために配られた「安定ヨウ素剤」や外部被ばくの低減三原則などについて説明。この講話で得た知識を踏まえ、講座の5日後には、学んだ知識を生かす場として、実際に保護者も交えた避難訓練を行いました。

避難訓練では原子力災害を想定し、「生徒を確実かつ安全に引き渡す方法」「連絡方法」「教員の動き」「車の誘導」などを確認します。校内放送で避難を呼びかけた後、生徒は先生の指示に従って行動。先生方は、車で迎えて来た保護者に避難の際の注意事項を伝えて生徒を引き渡します。保護者は帰宅後に学校に報告し、一連の訓練は終了です。

原子力災害の避難訓練を企画した当初、阿部先生は保護者から反対の声が上がるのではないかと心配しましたが、実際は「訓練は必要なこと」と肯定的な声が多く寄せられたそうです。

「震災は過去のものか それとも続いているのか」

今年の3月11日には、全校生徒の参加の下で追悼集会が行われました。阿部先生は生徒に向けて、「震災は、過去のものでしょうか、それとも今も続いているものでしょうか」と改めて質問を投げかけます。

「福島県産食品への意識調査では、震災から13年経過している現在も『放射線の影響が気になることから、家族や子どもにも福島県産の食材を食べさせるのをためらう』と一定数の人が回答しています。震災は過去のことではないと認識した上で、風評被害の払拭や復興という観点から、福島県の現状について正しく伝えられる人材になってほしい。そのためには震災を自分ごととして捉え、将来どのように復興に関わっていくのか、自分の考えを持つことが大切だと話しました」

福島県に生まれ育った生徒だからこそ直面する難しい課題ですが、阿部先生は放射線教育をはじめ、震災を学ぶためのさまざまな機会を創出し、繰り返し実践していきたいと力強く語ります。

震災を主体的に学ぶ 体験談を交えた「道徳教育」

もう一つ、阿部先生が震災教育として取り入れたのが「道徳教育」です。教材には阿部先生も作成に携わった『ふくしま道徳教育資料集全3集』(画像6)を使用しました。資料集には、福島県で被災した方々の体験談を道徳教材としてまとめたエピソードが収録されています。震災の記憶がなくても、当時の人々の思いや行動を知れば、自分ごととして捉えられると考えたのです。講師には、同じくこの資料集の作成に携わった日本大学工学部の渡邊真魚教授を招きました。

「震災に関する知識を持つのはもちろん大切ですが、それだけではなく生徒の内面に働きかけることも必要だと感じています。『自分が震災の場にいたらどうしただろう』という想像が、主体性を持った学びにつながると思います」

知識と心の両輪をうまく回すことが、「3・11からの学び」をより強固なものにしています。

生徒だけではなく 先生方にも必要性を伝える

福島市の南部に位置する松陵中学校では、震災教育以外にも、周辺にある吾妻山・安達太良山の火山災害について学んだり、火災が起きた場合の避難経路をiPad上で確認しながら話し合ったりと、身近な災害から身を守る教育も行っています。阿部先生は「3・11からの学び」の取り組みを通して、少しずつ「自分で考えて判断しよう」と考える生徒が増えてきたと感じています。

一方で、課題も浮かび上がっています。

「生徒だけではなく、若手の先生や他県から赴任された先生方、保護者の中にも、震災について知らない方が多くなっています。その中で、なぜ震災について学ぶ必要があるのか、まずは先生たちをしっかり理解していただき、震災から得た教訓が生徒たちの将来に必ず役立つ力となることを信じて、教育に当たっていた、だくことが必要だと感じています」

そのためにも、阿部先生は助成金などを活用して教員向けの研修を実施。今年度も、引き続き行う予定です。

放射線教育を通して育む ふるさとへの思い

2025年度から、松陵中学校は松川町内の3つの小学校とともに^{※2}義務教育学校として生まれ変わります。震災・放射線教育も、これからは9年間で取り組めるため、より幅広い学びにつながると阿部先生は期待しています。

今後の目標をうかがうと、引き続き原子力災害の避難訓練を継続するなど、震災からの学びを形骸化させないようにしたいとのこと。そして、これからは地域や近隣の大学を巻き込んだ活動に発展させたいと話します。

「震災を自分ごととして捉えて得た知識や考えがあれば、さまざまな場面において自分の言葉で発信できる大人になると思っています。ここでの学びをもとに、生徒たちがふるさとを誇りに思い、それが福島の復興につながることを期待します」

生徒たちの未来を見据えた阿部先生の震災・放射線教育が、生徒たちを力強く成長させようとしています。



9

7. 火山災害の学習では、火山灰の観察や災害が起こるメカニズム、避難の方法などを学びます
8. 2年生はコミュニティ福島を見学。霧箱の実験も行いました
9. 阿部先生が福島県教育委員会で作成した「放射線に関する指導資料」。何度も改善を重ね、ブラッシュアップしています



8



7

※2 小学校から中学校までの9年間の義務教育を一貫して行う新しい学校の校種